

氏名	岡田 晃
学位の種類	博士（英語学）
学位記番号	博甲第 93 号
学位授与年月日	2012 年 3 月 22 日
審査研究科	外国語学研究科
論文題目	Negative Prefixation in the History of English
論文審査委員会	（主査）大東文化大学教授 鈴木 敬了 （副査）大東文化大学教授 山崎 俊次 （副査）大東文化大学教授 大月 実 （副査）広島女学院大学教授 米倉 綽

岡田 晃 博士論文 審査報告

岡田晃氏は平成 11 年 3 月大東文化大学外国語学部英語学科を卒業したが、在学中の平成 10 年 4 月より平成 11 年 5 月まで米国ミシガン州立ウエスタンミシガン大学に交換留学生として留学し英語力に一層磨きをかけている。平成 12 年 4 月に大東文化大学大学院外国語学研究科英語学専攻修士課程に入学し、平成 13 年 5 月から同年 12 月まで米国アリゾナ州立ノーザンアリゾナ大学に大東文化大学奨学金を得て再び留学を果たし、言語学、特にコーパス言語学についてより深く学んだ。平成 15 年 3 月修士課程を修了し、平成 17 年 4 月より博士課程後期課程に入学し、高等学校および大学での非常勤講師として勤務しながら博士論文の執筆を目標に研究を継続し、このたび博士学位申請論文を提出する運びとなった。

博士学位申請論文 *Negative Prefixation in the History of English*（以下、本論文と略称）に関わる研究論文として以下の論文があり、これらの研究業績を基盤として本論文を執筆し「外国語学研究科博士課程後期課程英語学専攻の学位に関する細則」（平成 23 年 5 月 16 日改正・施行）に則り、平成 23 年 9 月 30 日に大学院事務室に提出した。その後、博士論文指導委員会（委員長大月実教授）は大学院事務室での 2 週間にわたる事前開示において特に異議のコメントがないことを踏まえ資格審査を行い、10 月 31 日の本論文提出を認めた。

これまでの論文は 10 篇あり、1 篇は学外の全国規模の学会である英語コーパス学会の学術雑誌に掲載され（論文 9 参照）またもう 1 篇は国際英語史学会（SHELL）の選抜論文集（論文 10 参照）所収となっている。特に後者の論文はドイツの一流出版社である Peter

Lang 社から刊行されていることは課程博士の学生としては特筆すべき業績である。また学会発表は7件あり、このうち3件は全国規模の学会である日本中世英語英文学会、英語コーパス学会、近代英語協会における学会発表であり、さらに国際英語史学会（SHELL）における国際学会発表を行っている。

1. 「否定接頭辞 *in-*, *un-*, *non-* のアメリカ英語における使用頻度の変遷 —Brown Corpus と Frown Corpus を検索して—」2001年 *Studies in English Corpus Linguistics* II 大東文化大学外国語学部英語学科大東英語コーパス編纂室 pp. 65-72.
2. “The Features of English Prefixes *in-*, *un-* and *non-*” 2002年 『外国語学研究』第3号 大東文化大学大学院外国語学研究科 pp. 41-52.
3. 「否定接頭辞 *un-* の言語学的特徴」2007年 『外国語学研究』第8号 大東文化大学大学院外国語学研究科 pp. 77-89.
4. “A Corpus-Based Study of the Negative Prefixes, *in-* and *un-*, in Modern English” 2007年 *Studies in English Corpus Linguistics* VIII 大東文化大学外国語学部英語学科大東英語コーパス編纂室 pp. 1-12.
5. 「否定接頭辞 *non-* の言語学的特徴—*in-* と *un-* との比較において—」2008年 『語学教育研究論叢』第25号 大東文化大学語学教育研究所 pp. 163-178.
6. “The Productivity of the Foreign Negative Prefix *in-* in the Middle English Period —The Comparison with the Present day English” 2008年 『外国語学会誌』No.38 大東文化大学外国語学会 pp. 273-283.
7. 「中英語から初期近代英語にかけての否定接頭辞 *un-* の外来語付加について —*in-* との比較において—」2009年 『外国語学研究』第10号 大東文化大学大学院外国語学研究科 pp. 57-68.
8. “Some Historical Analyses of the English Negative Prefixes —Comparison in Latinate *in-* and Germanic *un-*—” 2009年 『語学教育研究論叢』第26号 大東文化大学語学教育研究所 pp.199-209.
9. 「*Piers Plowman* における否定接頭辞 *in-* と *un-* の考察」2010年 『英語コーパス研究』第17号 英語コーパス学会 pp. 67-80.

10. “The Analyses of the English Negative Prefixes in the History of English,” in Imahayashi, Osamu, Yoshiyuki Nakao, and Michiko Ogura (eds), *Aspects of the History of English Language and Literature: Selected Papers Read at SHELL 2009, Hiroshima, Studies in English Medieval Language and Literature* 25, Frankfurt am Main: Peter Lang, pp. 343-351, (2010).

1. 論文の要旨および特色

当論文では、否定接頭辞のうち言語学的特徴が似ている *in-*と *un-*を主に取り上げ、いつ、どのような状況で *in-* / *un-*の二重語が生まれ、最終的に、なぜ時には一方が廃用になり、また時には両方が生き残っていったかを考察している。変化の要因として教育の普及がある程度影響した可能性があり、また使用域の違いが少なからず影響を及ぼしていると推測できる。本論文の視点は (1) 否定接頭辞 *in-*と *un-*の使用頻度 (2) 品詞付加の考察 (3) 二重語の考察の3点である。各章ではこれら3つの視点を中心に考察が進められている。

本論文の構成は以下のとおりである。

Introduction

1. Literature review

- 1.1. Overview of previous studies
- 1.2. Jespersen (1917, 1924) and Marchand (1969)
- 1.3. Kwon (1997)
- 1.4. Yonekura (2006)
- 1.5. A summary of views on double negative forms
- 1.6. Siegel (1974) and Allen (1978)
- 1.7. Database: dictionaries and corpora

2. Methodology

- 2.1. Class 1 affixes and Class 2 affixes
- 2.2. Word classes
- 2.3. Era separation
- 2.4. Morphological terminology

3. Negative affixation

- 3.1. Negative affixes in English
- 3.2. How many negative prefixes are there in English?
- 3.3. Rare or obsolete negative prefixes
- 3.4. Germanic and foreign affixes
- 3.5. Problems in prefixation of *un-*

4. Linguistic features of *in-*, *un-* and *non-*

4.1. Introduction of phonology

4.1.1. Assimilation

4.1.1.1. *In-*

4.1.1.2. *Un-* and *non-*

4.1.2. Stress shift

4.1.3. Phonological features: summary

4.2. Introduction of morphology

4.2.1. Morphological features of *in-*

4.2.2. Relations between *in-* and some suffixes

4.2.3. Morphological features of *un-* and relations between *un-* and some suffixes

4.2.3.1. Adjectives

4.2.3.2. Nouns

4.2.3.3. Adverbs

4.2.3.4. Participial group

4.2.4. Morphological features of *non-*

4.2.5. Comparison of the morphological features of *in-*, *un-* and *non-*

4.2.6. Frequency of occurrence of *in-* and *un-* in spoken text

4.2.7. Morphological features: summary

4.2.8. Semantic features of *in-*, *un-* and *non-*

4.2.9. Semantic features: summary

5. Overview of *in-* and *non-*

5.1. Introduction

5.2. Definition and purpose

5.3. Five *in-* + Germanic words in MED

5.4. Overall investigations of *in-* + Germanic words

5.5. Analyses of each of the *in-* words

5.6. General information of *non-*

5.7. Period of lower case of *non-* in English

5.8. Conclusions to chapter 5

6. Diachronic Change

6.1. Introduction of *Piers Plowman*

6.1.1. Database

6.1.2. Lists of *in-* / *un-* words

6.1.3. Frequency of *in-* and *un-*

6.1.4. Description of the syntactic categories

- 6.1.5. Relation between *in-* / *un-* and alliteration
- 6.1.6. Conclusions to chapter 6.1.
- 6.2. Introduction of Chancery English
 - 6.2.1. Definition
 - 6.2.2. Lists of derived words
 - 6.2.3. Analyses of frequency
 - 6.2.4. Syntactic categories
 - 6.2.5. Obsolete words in PE
 - 6.2.6. Conclusions to chapter 6.2.
- 6.3. Introduction of *Paston Letters*
 - 6.3.1. Definition
 - 6.3.2. Lists of *in-* and *un-* words
 - 6.3.3. Frequency
 - 6.3.4. Syntactic categories
 - 6.3.5. Obsolete or rare words
 - 6.3.6. Conclusions to chapter 6.3.
- 6.4. Introduction in the comparison of the three literatures
 - 6.4.1. The frequency of the occurrence of *in-* and *un-*
 - 6.4.2. The frequency of the occurrence in syntactic categories
 - 6.4.3. The investigations of the morphological doublets
 - 6.4.4. Conclusions to chapter 6.4.
- 6.5. Introduction of Shakespeare
 - 6.5.1. Definitions
 - 6.5.2. Lists of doublets
 - 6.5.3. Comparison of frequency
 - 6.5.4. Words of first appearance in Shakespeare
 - 6.5.5. Conclusions to chapter 6.5.

7. Doublets

- 7.1. Introduction of doublets
 - 7.1.1. First appearance and last recorded use of loan words examined
 - 7.1.2. The number of examples appearing in the OED of the 50 loan words and their periods of use
 - 7.1.3. Early examples from the 14th to the 15th centuries
 - 7.1.4. Conclusion to chapter 7.1.
- 7.2. Introduction of PE doublets
 - 7.2.1. Analyses of the doublets

7.2.2. The occurrence of the *in-* / *un-* doublets

7.2.3. Non-occurrence of the doublets

7.2.4. Doublets which are prefixed by *in-* and *un-*

7.2.5. Doublets in which *un-* exclusively appears with foreign words

7.2.6. Analysis of frequent, elegant and firm prefixed by *in-* and *un-*

7.2.7. Conclusion to chapter 7.2.

8. Conclusions

References

第 1 章では本論文を執筆する上での必要な先行研究および資料（データベース）を紹介している。先行研究に関しては 6 人の言語学者の派生形態論、特に語形成における考察に焦点をあて紹介している。中でも否定接頭辞について詳細に記述された理論に注目し、その分析手法を本論文の基盤としている。さらに、二重語（一部は三重語、四重語）についての各学者間で異なる見解を詳述している。資料となるデータベースに関するセクションでは、当論文内で使用したオンライン版 *The Oxford English Dictionary 2nd edition (OED)* およびオンライン版 *Middle English Dictionary (MED)* のデータ収集方法を解説し、これらを補完するために使用した学習辞書についても言及している。また頻度数調査で使用した 3 つのコーパス（1990 年前後のイギリス英語コーパス *British National Corpus (BNC)*、1960 年代の米語コーパス *Brown Corpus*、1990 年代の米語コーパス *Frown Corpus*）についてもそれぞれの特徴を述べている。

第 2 章では、形態論的な見地から本論文における必要な専門用語、定義を紹介している。具体的には先行研究で取り上げた Siegel (1979) や Allen (1978) の語形成研究における接辞の分類 (Class 1, Class 2) について、その有効性を例示し音韻論的、形態論的、意味論的な視点から両クラスの相違点をまとめている。また、各章にわたって主要な分析項目としている品詞別（主に形容詞、名詞、副詞）考察、語形成規則、および語形成における分析法 (tree diagram) について解説している。さらに、OED を使った各年代の使用例頻度調査の方法および分析手法を記述している。

第 3 章では、先行研究を基に中英語期以降の外来語の影響および現代英語における外来語と本来語の比率を紹介している。次に、英語教育学的な視点および英語学的な視点から現代英語における否定接辞の数を調査し、学者間で主張が一致していないことを指摘している。また *wan-* など、古英語期においては使われていたが現代には残らずに消滅した英語本来語起源の否定接頭辞の事例も紹介している。そして同じ英語起源ながら現代英語でも頻繁に使われている *un-* の問題点（品詞付加の矛盾点、複合語付加）を示している。

第 4 章では、否定接頭辞の *in-*、*un-*、*non-* を取り上げ言語学特徴として音韻的、形態的、意味的な視点から考察を行い、それぞれの特徴を記述している。音韻的考察では、同化現象、強勢移動が見られる *in-* の特異性が中心となっており、形態的考察では *Brown Corpus* と

Frown Corpus を資料として使い、これら 3 つの接辞の頻度調査を行い、どの品詞への付加が多く見られるか、また付加される基体の起源、現代における特異的な派生語が見られるか等の考察を行った。意味的考察では、音韻的特異性を示した *in-* の特徴がここでも現れ、*un-*、*non-* にはない強意の *in-* について論じた。また *non-* は本来、他の接頭辞とは異なる否定の意味を有する点を事例に基づき論じた。

第 5 章では、*un-* と比較しながら、外来系の *in-* と *non-* を考察し、これらの特徴を示した。具体的には MED で 5 語見られる外来語接辞 *in-* のゲルマン語系語彙への付加について調査し BNC を検索して現代英語において、これらの 5 語が使用されているかを確認し、その後 OED でそれらの初出例を明示した。一方 *non-* の考察では、BNC で得られた中で特に頻度数の高い *non-* 派生語 50 語を抽出し 14 世紀から 19 世紀までの OED におけるそれぞれの使用例および頻度数を調査した。17 世紀になると一気に *non-* 派生語の頻度数が増えていることが明らかとなった。その要因として *non-* の英語内における定着性の高さを指摘した。その後、一時的に頻度数は減少したが 19 世紀になると再び上昇した点をデータで明示した。

第 6 章では、中英語期から近代英語期における代表的作品を取り上げ、それらの中で見られる否定接頭辞の頻度と使用例を考察している。14 世紀に書かれた *Piers Plowman* では、頭韻詩であることから、頭韻と接辞選択の関係性について考察したが直接的に影響がないことが判明した。15 世紀に書かれた Chancery English では、当時使われていた否定接辞付加派生語が現代では消滅してしまった例がいくつか見られた。14 世紀に書かれた *Paston Letters* では現代では稀な派生形態である [*in-* + X + *-ed*] に関する考察を行った。さらに、これまでの考察を元に、3 作品の考察結果を比較し、最後に Shakespeare 作品内における二重語に関して BNC を検索し現代英語における使用頻度と比較した。

第 7 章は、現代における Jespersen (1954) と Marchand (1969) が指摘した二重語 50 語の OED における使用例および頻度調査に充てている。1300 年代においては否定接頭辞の使い分けがまだはっきりとしておらず、それ以降、二重語が誕生していったと考えられ、通常では *in-* を使うと思われるようなラテン語系の基体に *un-* が付く例も見られた。しかしながら近代英語期になると徐々に外来語と母語の使い分けがなされるようになった。英語を母語とする人たちの外来語に対する意識や母語に対する意識が高まる中で、その使い分けをする傾向がみられたが、一方で現代英語には二重語として残ったものもある。そこで具体的な二重語の使用例を OED より抽出し、歴史的考察を行った。

第 8 章では全体の結論を述べている。本研究では否定接頭辞の頻度数、品詞別考察、二重語の考察を行ったが、頻度数では、中英語期から現代英語まで *un-* が安定して使われ続けていることが明らかとなった。しかし、*non-* は複合語にも付加されることから考えれば生産力が高いと言え、今後とも基体の起源を問わず無数の新語を作り出していくことが予想される。品詞別考察では、各時代において、名詞や副詞よりも形容詞付加の例が圧倒的に多いことが判明した。*in-* の動詞への付加が過去には見られたが、現代では *non-*、*dis-* といった一部の否定接頭辞のみが持つ特徴となっている。二重語の考察では、現代英語期のみな

らず中英語期以降継続して存在し続けた。そのうちの一方だけが残るケースと、双方とも残るケースがあり、後者の場合、徐々に意味の分化が起こり、使用域が重ならないよう使い分けがなされたことが明らかとなった。

2. 論文の審査内容および評価

博士学位論文審査委員会は10月30日の本論文提出後、外国語学研究科委員会の議に基づき発足した。委員は、コーパス言語学を専門とする山崎俊次教授、意味論を専門とする大月実教授、学外からは歴史英語学で特に形態論および文体論分野で著名な米倉綽教授（近代英語協会会長）を副査に迎え、歴史英語学分野の指導教授として鈴木が主査をつとめた。

口述試験は平成24年2月4日、大東文化会館を会場とし公開審査で実施された。始めに本人のプレゼンテーションがあり、続いて各審査委員との質疑応答が行われ、引き続き、別室にて博士学位論文審査委員会の協議が行われた。各審査委員のコメントを以下にまとめる。

否定は、言語の根幹に関わる重要問題で難問も含む大きなテーマであるが、それを敢えて選んで挑戦した意欲的な研究である。特に *in-un* の二重語がいつ頃出現して、どちらがいつ頃消失したかにつき詳細に調査してまとめた意義は大きいと言える。また OED の用例全体を資料として歴史的に俯瞰した研究は初めてであり、歴史英語学史的にも意義が認められる。歴史的観点から統計を取り考察した点がこの論文の優れた特徴であり評価できる点である。今後の展望としては、異なる否定接頭辞の意味的差異に関しては、絶対的区別としてではなく典型性に着目することにより自説の提示が可能となるであろうし、様相との関連性を検討することにより更なる発展性が期待できるであろう

本論文は英語における否定を意味する接頭辞 *in-*、*un-*、*non-*のうち、特に現代英語でも競合している *in-* と *un-* を取り上げて、その形態的、意味的特徴を通時的観点から考察している。この岡田氏の研究は語形成に焦点をあてることで、現代英語の語彙に *in-* および *un-* 派生語がいかに貢献しているかを明らかにし、今後の史的な語形成研究の方向性を示唆したものである。

第1章では主要な先行研究を簡潔に解説し、同時に岡田氏自身も BNC, Brown Corpus, Frown Corpus を用いて先行研究で指摘されている言語的事実を確認し、その疑問点を明らかにしている。

第2章では先行研究で確立している語形成の言語的事実に基づいて『オックスフォード英語辞典』を利用し、*in-* と *un-* 派生語の使用頻度、およびそれらが表す意味について考察している。

第3章では古英語から中英語、近代英語を通して、この否定辞付加による派生語が現代英語に取り入れられた事例を取り上げて、その経緯および言語的、文化的背景を論じている。

第4章、第5章、第6章では Brown Corpus, Frown Corpus さらには中英語で書かれ

た作品、特に *Piers Plowman*、Chancery English、*Paston Letters* 初期近代英語の中心的作家である Shakespeare の作品を調査・分析し、*in-*と *un-*派生語の競合、頻度、意味の相違を考察している。

第 7 章では第 4 章から第 6 章の論述を踏まえて、語形成研究のバイブルともいえる Marchand (1969) の指摘を検証し、今後の研究課題を明らかにしている。

口述試問では、以上の内容について、更なる説明を求めると同時に、疑問点を指摘したが、岡田氏は具体的に例をあげて、的確な応答をした。よって審査委員の質問に岡田氏は誠実かつ十分に対応したと認められる。

この口述試問を通して、本研究の論点はさらに深まり、本研究が英語の否定接辞付加による派生語の本質と現代英語の語彙への貢献をさらに解明することになり、今後の語形成研究のみならず言語学、英語学の歴史的研究に大いに寄与する有意義な研究と評価できる。よって、本論文は課程博士の学位に相応しい内容と評価できる。

本論文は、否定接頭辞 *in-*、*un-*、*non-*の歴史的、言語学的な観点から、その使用頻度、どのような品詞につくか、二重語の考察を研究課題とし、OED、MED、さらに BNC を使い、アメリカ英語については Brown、Frown Corpus をデータベースとしており、中英語期から近代英語期では、*Piers Plowman*、*Paston Letters*、Shakespeare の作品も検索した広範囲に渡る拘束形態素の派生接辞研究であり、古英語、中英語、近代英語と英語史の変遷に沿って、否定接辞の研究をしている大作である。また言語学的な分析を、音韻論、形態論、意味論の分野に分けて記述しており説明力が高く、その点でも評価できる。

今後の研究発展に寄与すると思われる審査委員のコメントをまとめる。構成面に関しては第 2 章の方法論において理論的な面、データ処理方法、分析方法等をさらに詳述すべきであり、また形態素の全体的説明をする際に屈折接辞についても言及すると良いであろう。第 4 章において音韻論、形態論を設けているが意味論についても独立して章にした方がよりバランスがとれると思われる。分析の考察として *non-* は生産性が高いという見解は、どんな品詞に付加されるか等の観点から考えると *in-*、*un-* と同じレベルで比較することに多少の無理があると思われ、今後検討の余地があろう。また否定接頭辞を含む形態素の安定化の要因として、「教育の普及」を指摘しているが今後、他の社会的・歴史的な要因、印刷術の確立等も考慮することでより主張に説得力が増すと思われる。データベースに関しては、さらに米語コーパスの ANC 等を追加することにより、イギリス英語と米語のコーパスのバランスがとれるものと思われる。表記については表の印刷の一部にずれ、参考文献における本文引用文献の情報の脱落があり、より丁寧な論文執筆が望まれる。

以上、今後の改善点が指摘されているが表記上の修正は全体からみて一部であり、修正は容易であると判断される。他方、内容面では、本論文の基盤をなす論文が国際学会の選抜論文集所収となるなど、国際的レベルに達しているものと認められる。また本論文のテーマで歴史的にこれほど広範囲に研究されたものはこれまでなく極めて独創的なものと言え、分析結果の位置づけも的確である。したがって岡田晃氏の設定した研究目的は十分に

達成されている点に鑑みて本論文は課程博士の学位請求論文として十分な水準に達しているものと判断できる。

3. 結論

以上の審査内容および論文評価に基づき、本論文を審査対象とする博士学位論文審査委員会は全員一致をもって、本論文は博士（英語学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する次第である。